

□横浜やすらぎの郷霊園□

開園並に管理棟落慶式を挙行

——三十周年記念事業で開発——

横浜市街地から多摩丘陵にさしかかる緑ゆたかな一角に「横浜やすらぎの郷霊園」が開発された。〃宗教・宗派・国籍〃を問わない霊園で、交通の便もよく、晴れた日には霊峰富士や丹沢の山々を望む恵まれた環境にある。霊園事業の通例を破ったのは、宗教法人善光寺自体が経営事業主体となっていることである。六月五日に開園並に管理棟落慶式が執り行なわれた。

善光寺は黒田武志住職が昭和四十四年、ナリス化粧品初の代会長を開基に迎え、本師・黒田白純大和尚を開山に勧請し、山号を「成寿山」

と名づけて開創した寺である。これまで開創十五周年の記念事業として「横浜善光寺留学僧育英会」を設立し、仏教による世界平和に寄与する人材の育成を寺檀一体の報恩行として継続している。霊園開発は善光寺に帰依する人々の願いに応えるため、開創三十周年の記念事業として二年がかりで進めてきた。

霊園の所在地は横浜市旭区上川井町字堀谷。規模は開発総面積六、九六六平方 m^2 （進入道路を含む）、販売敷地面積一、六〇〇平方 m^2 。昨年九月に造成が完了し、付帯施設として約五十坪・

二階建ての管理棟、駐車場がこのほど完成した。管理棟の落慶法要は本寺の栃木県光真寺・黒田俊雄住職の導師で営まれ、(株)開成プランニング、日広建設(株)、指定石材店十三社、その他に感謝状が授与された。

駒沢女子大学の東隆眞学長は「世にたくさん霊園はあるが、この霊園は黒田老師の魂が入っている。黒田老師の魂が、この霊園にご縁のある方々に真のやすらぎを招く。そういう点で、他と大いに異なるところがある」と祝意を表し、黒田住職は、三十年来の願いがかなったことに万感を込めて謝辞を述べた。

祝宴の席上、黒田住職の修行時代からの「心

お祝いの言葉

東郷 敏

の友」である東郷敏氏（元ナリス化粧品常務取締役）は、「黒田方丈は『世界は一つの村』と考えているお方だ。そのお方がグローバルな霊園を実現された。かねがね、お墓は心のよりどころ、先祖代々のすみか、人々のやすらぎの郷でなければならぬと念じておられたようだ。この霊園は霊園利益事業に非ず、社会貢献事業なり。企画から管理運営まで僧侶が加わり、すべて善光寺がさせていただく霊園だ。プロの石材屋さん、葬儀屋さん、仏壇屋さんと連絡をとり、心を尽くしてやすらぎを提供しようとするこの霊園こそ、善光寺黒田方丈の真骨頂です」と称賛した。

本日は、霊園の整備と管理棟が落慶し、まことにおめでとうございます。

親孝行の第一人者と称される曾子の言葉に、「終わりを慎み遠きを追えば、人の徳厚きに帰す」

とありますが、人それぞれに先祖代々あつて今日の我が身があり、遠くに見えぬ諸々の恩人に心致し、また近くは家族の大切な存在を失つて、初めてその尊さを知る。そんな人々の生・老・病・死、その心慮ばかりグローバリスト黒田武志方丈が、常に地球を一つの村として考えるグローバリズムの霊園。それがここ「やすらぎの郷」として実現しました。

この緑豊かな富士の望める大地に新しい霊園。陽当たりよければ風当たりも強し、完成まで方丈の手となり足となり関わり働いた方々のご苦労は、人知れず並のものではなかったと想像いたします。本当にご苦労さまでした。

方丈はかねがねお墓とは心の拠り所、永代の住まいなりと申され、安心と安らぎを求めて止まない心があり、常にその用意と準備がありました。そして新しい時代の新しい在り方、皆様のニーズ（必要性）や、否ウオントツ（欲しいも

の）に応える在り方を模索していたのです。

霊園の企画から開発、管理、運営まで僧侶が関わり、その道のプロフェッショナルの方々と密接な繋がりをもって、すべてを善光寺が行う。当然にして宗旨、宗派を問わないし拘らない。この郷は霊園事業にあらざして社会貢献事業です。まことにもっておおらかな寿陵、天地に響き心と魂を揺さぶる永遠の霊園。これこそ横浜善光寺黒田方丈の表現であり、真骨頂であります。

どうぞ本日ご列席の皆様、この郷を中身においてやすらぎにおいて、世界一の郷を高めて下さいませ。

先ずはおめでとうございました。

□リポーター□

霊園開園式・管理棟落慶式に出席して

リポーター 川内 朋子

『横浜やすらぎの郷開園式並びに管理棟落慶式』が、気持ちのいい青空が広がる平成十二年六月五日（月曜日）の午前十一時から、完成したばかりの管理棟の二階で厳かに執り行なわれた。

一階から落慶法要の始まりの鉦の音が響く。開園にご協力いただいた方々や檀家の方々総勢百三十余人が見守るなか、導師、本寺光真寺黒田俊雄老師が祭壇の前に立たれいよいよ法要が始まった。善光寺住職黒田武志老師はというと、

開式の辞が始まると同時にずっと頭を下げ続けていらっしやる。おそらく皆さんへの敬意と感謝の気持ちを表わしていらっしやるのだろうと想像するが、その姿が印象的だった。

私は芸能リポーターという仕事をしているため、このような厳粛な法要に出席させていたただくのは初めてのこと。もちろん檀家でもないが、黒田老師とはご縁があつてお知り合いとなりこの日は取材という形で出席させていただいた。ただ、黒田老師にとって霊園を持つことは三十

年来の念願であり、大変なご苦労があったと伺っている。どんなにお喜びか、計り知れないことである。

そしてもう一人、喜びを隠せない方がいらっしやる。元ナリス化粧品常務取締役の東郷敏さんである。ご存じのように東郷さんは、黒田老師が總持寺の修行僧から善光寺を建てられるときに、全国を廻りたつたの三ヶ月でその資金を調達された方である。その東郷さんは、

「黒田武志という方はただただ人のためにと
いう方なんです。一切〃私が無い。〃このやすら
ぎの郷だって霊園利益事業ではなく、方丈のな
さっていることは社会貢献事業だ」
と言いつ切る。

「損得無しで世界に貢献する。そして常に地球
をひとつの村と考える。いわゆるグローバルス
ト。私はそれが最高に好きです。そういう心は
私自身ないことですからね。まったく方丈とい

う御方は、どんな構造をしているのか不思議で
ならない」とその総力に相好を崩す。

「今日のご老師にとつて、うれしいでしょう
ね」と尋ねると、

「最高でしょう。しかし、いつになく静か
です。というのは、方丈の気持ちの中でこの仕事
は今日ではなく、昨日で終わつたんだと思いま
すよ。もう次のことを考えていると思ふんです。
あの泰然自若ぶりは、今日の喜びより次のこと。
という在り方。方丈とはそういう方なんです」
方丈とは四十年のおつきあい、その東郷さん
ならではの洞察力。

さらに東郷さんはこうもおつしやる。

「男が男に惚れるというのか。あの方のた
めなら死んでもいいと思うときが、しょっちゅ
うありますよ。短い人生の中では滅多にないこ
とです。本当に〃私心〃の無い人間とは、どう
してこんなに魅力があるんでしょうね」見事に

黒田方丈という人となりを表現しているように思った。

『横浜やすらぎの郷霊園』は開発総面積六九六六平方^{メートル}、販売敷地面積一六〇〇平方^{メートル}、駐車場も完備。市内としては希少価値のある宗派不問の霊園として誕生し、日当たりのよい穏やかな丘陵に広がっている。晴れた日には富士山や丹沢の山々を望むことができ、まさにやすらぎの聖地。と、以上はいただいたパンフレットに書いてあったことだが、本当に見渡すかぎり畑がつづき、静かで空気がおいしいことに間違いない。管理棟の前に立つと遠くにバス通りの八王子街道が見えるが、車の騒音はここまでは届かない。のんびりとゆったりとした気持ちになる。今日は晴れてはいるものの、大きな雲に阻まれて残念ながら富士山までは見えなかった。

さて落慶法要は、浄道場、献湯菓茶、仏像点眼、普同三拜、拈香法語、読経、回向、普同三

拜とつづき、次に霊園開園にまた管理棟落慶に協力くださった方々へ感謝状と記念品が渡された。

そして、お三方からの祝辞の後は、いよいよ黒田老師の謝辞である。この時初めて顔を上げられたご老師は、

「善光寺には今まで墓地がありませんでした。欲しい欲しいと三十年間思っておりました。その思いが今日ここに叶いました。本当に本当に皆様のおかげだと深く感謝し、厚くお礼を申し上げます」

一言、一言、噛み締めるように話される老師の言葉には力がこもっている。が、感傷的な響きはしない。まさに東郷さんのおっしゃる通り、静かな響きなのである。一同が緊張して耳を傾けるなかご老師はつづけて、

「皆さん、間もなく十一時五十分になります。五十分にならないと昼食の準備が整わないとい

うんですね。そろそろ大丈夫のようです。さあ
さあ、向こうでくつろいでください」

この言葉で皆、厳肅な空気が緊張が解けホツ
と肩の力が抜けた。

私はこれなのだと思った。三十年來の念願で
あった墓地完成したのだから、祝辞でその感
慨や苦勞をしみじみと話されても当然のこと。
それを言葉少なに抑え、唯々皆さんを気づかう。
偉いお坊様だと、自分と距離感があつて当たり
前だと思ふのだが、ご老師は「お陰さまで、お
陰さまで」と言いながらすつとこちらに近づい
て来てくださる。ここが魅力の一つなのだろう
な、と思つた。

場所を変えての祝宴は、ご老師を中心に談笑
タイム。その輪の中にさきほど祝辞を述べられ
た一人、潮音寺住職安藤康哉老師に今一度お祝
いの辞を聞いた。

「おめでたい、ありがたい、すばらしいの一



言ですね。黒田老師の熱血溢れる心情が、靈園の中に生きています。

実は今日車に乗るときに思ったんです。高校生の時に見た『未完の交響曲』という映画のことを。すばらしいメロディーと『我が恋の終わらざる如く、またこの曲も終わらざるべし』というセリフを残したのですが、これは私たちに夢を与えてくれるものです。同じようにご老師も私たちに夢を与えてくれます。

第一楽章は、無から出発した善光寺の建立です。第二楽章は、その善光寺を国際的に発展させ、さらに学問をとおして仏教をインターナショナルにしようというものです。この考え方はすばらしいものです。そして今度の第三楽章は、グローバルなことではなくもつと地元に着した、民衆の心に密着した、その心を探えて造ったのが、この靈園だと思います。

老師の心というのは自分の志す一筋の道を命

を賭けて、さらに己の力を他のために傾け尽くす。その心こそ、仏心であり、菩提心であり、願心なんです。これをお持ちなのだから、これは未完でなくして必ず第四楽章があり、第五楽章が作られるであろうことを願っていますし、それは可能であると思いますね」

と、よほどの思いや願いがあたりだったのか、安藤老師は一気に話された。地元に着、私はこの話しにハッと思いあたることがあった。

私は今日、横浜から相模鉄道に乗り三ツ境駅で降りた。急行は十分おきに出ていて、十三分ほどで三ツ境駅に着く。そこからバスもあるが、私はタクシーに乗った。

「やすらぎの郷靈園に行ってください」

「ああ、新しくできたところですね。実は僕の友人が買ったんですよ。近くにゴルフ場があるくらいで何にもないけど、いいところですよ。だから僕も買おうか考えているんですよ」

「私も初めていくんです。今日が落慶式なんですよ」

「ラッケイシキ？何ですか、それ」

たまたまと言ってしまうばそれまでだが、偶然乗り合わせたタクシーの運転手さんの言葉がうれしかった。新しくできたばかりの『やすらぎの郷霊園』を知っていたということではなく、安藤老師の言葉を借りれば、すでに地元の人に受け入れられているということが伝わってきたからだと思う。

さて、祝宴のにぎやかな談笑が続くなか、やはり法要で祝辞を述べられた駒沢女子大学学長、東隆眞先生にもお祝いの辞を聞く。黒田老師とは駒澤大学・大学院とご一緒に、以来四十年以上のお付き合いとか。

「喧嘩をしたり握手をしたり、ずいぶんしましたね。しかし、こんなデカイことをよくやったなあと感心します。老師の年来の宿願が一つ

また実を結んだ、彼の魂が一つの形をとったんですね。

さきほど『手を合わす やすらぎの郷 風さやか』と一句読ませていただきましたが、ここはその通りすばらしい。

不思議なことに、老師は絶対に失敗をしないんです。これは不思議ですね。『あれをやったけど、駄目だった』なんて話は聞いたことがない。それには緻密な計画と周りの人の協力があるからです。第一は奥さんでしょう。ひよっとしたら、奥さんの方が本当の住職かもしれないですよ（笑い）。私はそう思っているんです、本当はね。黒田さんはリモコンで動かされている（笑い）」

そういえばいつもご老師は「みち子、みち子」と呼んでいらっしやる。その存在の大きさを見逃してはならないのでしょうか。機会があったらリモコンをお持ちか、確かめる必要はありそう

だ。

最後は黒田ご老師にお話をと、近づいた。

「皆様のおかげであります。本当に感謝しております」

「法要ではどんなお気持ちでいらしたんですか」

「気持ちほただ一つですよ。お陰さまで有難うございますと。(ニコニコ笑いながら) 黒田武志は緊張蚊取り線香だなあって」

「この場所はどうかということから選ばれたんですか」

「お墓を作りたいなあと思っっているときに、ある方から紹介していただいたんです。もしご縁があったら、心の抛り処、心のやすらぎ場所、そんな霊園を作らせていただこうという気持ちでしたね。さきほど東郷さんが言ったように、ゆりかごからやすらぎの郷まで、これからこの郷が安心、平和、幸福感を抱くすばらしいところ

だ、と言われるように心尽くしてまいります。

さあ、取材はそれくらいにして、飲んで飲んで」

黒田老師はやはり多くを語ろうとはしない。

多くを語らなくとも、ご老師の気持ちや魂は檀家の皆さんの方がよく知っていらっしやる。これ以上求めてもご老師は決して話されないだろう。ようやく私にも解かってきた。

帰り際、『横浜やすらぎの郷霊園』の桐元さんが、

「裏の山に登るとききれいな夕日が眺められますよ。真っ赤な夕日に浮かぶ富士山を見ていると、何もかも忘れて気持ちがいいんです。今度ぜひ一度、登ってください」

そうだ、セミの鳴く頃に来てみよう。風に吹かれ、真っ赤な夕日に富士の山、見てみたい。俗世間を少しだけ離れて、心のやすらぎ、感じてみたい。